

吉例浮世絵大公開！三代豊国と歌川派



いまようみたてしのうこうしょう
39 三代歌川豊国「今様見立士農工商 職人」

三代歌川豊国（1786-1864）は、幕末の浮世絵界を代表する絵師の一人です。はじめ国貞の名でデビューし、得意の役者絵や美人画で、一躍人気絵師となりました。

59歳のとき豊国の名を襲名、一門を率いて膨大な数の作品を制作しました。弟子筋からは豊原国周・楊洲周延ら、明治時代のスター絵師たちが輩出されています。

江戸の人々の心をつかんだ、粋で清新な作品の数々をお楽しみください。

凡例：番号

作者（生没年）

作品タイトル

判形、制作年

☆シリーズ作品は、共通する事項を最初にまとめ、シリーズ名は『』であらわしています。

☆判形は浮世絵の寸法を表す規格で、大判は約390×260mmです。

☆技法は全て多色摺り木版画です。

☆作品リストには番号が付されていますが、展示構成の都合上、必ずしも番号順に展示されていません。

2014年3月8日（土）～3月30日（日）

町田市立国際版画美術館

プロローグ — 初代豊国と国貞

初代歌川豊国（1769～1825）は、役者絵や美人画を得意とした絵師でした。明快で美しい歌舞伎役者の姿は大衆に受け入れられ、明治まで続く歌川派繁栄の基礎を築きます。

のちに三代豊国となる国貞も、初代豊国の高弟の一人です。文化4年（1807）、22歳でデビューした国貞も、たちどころに大衆の人気を得ました。

1～3 歌川豊国（初代）

1 役者遊歩図 大判錦絵三枚続 寛政期（1789～1801）

役者絵を得意としていた初代豊国。花魁と川辺を歩く役者たちの顔が、個性的に描き分けられています。

2 清玄尼 岩井半四郎 綱女 市川団之助 松若丸 市川団十郎

団扇絵判錦絵 文化11年（1814）

恋に狂う女性、清玄尼（上）と許婚の松若丸（左下）。団扇に貼るための錦絵で、画面が丸くなっています。

3 頼光山入童子退治之図

大判錦絵 文化（1804～18）初期

源頼光の酒呑童子退治を描いた武者絵。遠近法を取り入れて奥行きを強調した「浮絵」です。

4~10 歌川国貞 (のちの三代豊国)

4 八島壇ノ浦源平合戦図

大判錦絵三枚続 文化期 (1804~18)

国貞初期の武者絵。夜空をバックに八島の戦いと壇の浦の戦い、両方を描きます。

5 紅毛油画風 成田山不動

大判錦絵 文政7年 (1824) 頃

「紅毛」という題からわかるように、オランダ風を意識しているのでしょうか。西洋風の模様が入った枠がついています。

6~8 『役者十二月』 摺物 文政11年 (1828) 頃

役者たちの姿を描いた摺物のシリーズ。摺物は俳人や狂歌師が絵師に発注して制作した非売品の版画です。交換やあいさつ用の配り物として楽しまれました。

6 一月・二月

7 七月・八月

8 十一月・十二月

五代目松本幸四郎 (右) と三代目尾上菊五郎 (左) が向かい合わせに配置された、緊張感のある構図です。

9 菅神天拝山満願ノ図

大判錦絵二枚続 文政 (1818~30) 末期

菅原道真が天拝山 (福岡県筑紫市) で雷神となる一幕。勇壮な武者絵のスタイルで描かれています。

10 岡部六弥太忠澄 薩摩守 忠度組討の図

大判錦絵 文政 (1818~30) 末期~天保 (1831~44) 初期

いかめしい顔の表現や力強いポーズによって、緊張感にみちた組討の場面を描き出しています。



I 華々しき三代豊国の活躍

—役者・美人・コラボレーション—



弘化元年 (1844)、59歳の正月に豊国の名を襲名すると、名実ともに浮世絵界の大御所として歌川派一門を率い、目覚しい活躍をみせます。豊国襲名以後は、国貞時代から得意の役者絵や美人画に加え、風景画の名手であった歌川広重との合作による作品も発表し、好評を博します。

長寿に恵まれた豊国は、元治元年 (1864) に79歳で没するまで旺盛に作画を続けました。総作品数は万を超えるとも言われます。

11~39 三代歌川豊国

11~21 『見立三十六歌撰』 大判錦絵 嘉永5年 (1852)

正方形の枠の中に、三十六歌仙の詠んだ和歌が書かれています。それぞれの和歌にちなむ歌舞伎の役を見立て、さらにその役にぴったりの役者をあてはめて描いたシリーズです。

11 柿本人丸 松浦さよ姫

和歌中の「舟」を佐用姫伝説で恋人が乗る舟になぞらえています。

12 紀貫之 関兵衛

歌中の「桜」にちなんで、天下統一の祈禱に使う護摩木にするために桜を切ろうとする関兵衛を描いています

13 三条院女 蔵人左近 時次郎

夜明けに浦里との仲を裂かれる役どころ、時次郎の姿です。

14 中納言朝忠 浦さと

遊女浦里は、No.13 に描かれている時次郎との恋仲を咎められ、雪責めにされる役どころです。

15 中納言家持 狐忠のぶ

親しい狐が叱けた青年、忠信を描いています。

16 在原業平朝臣 清玄

業平の「世の中に桜というものがなかったなら、春を過ごす人の心は穏やかでいられるだろう」という歌にかけて、桜姫に恋し、死んだ後も亡霊となって現れる清水寺の僧、清玄を題材にしています。

17 大中臣能宣 舍人松王丸

18 小野小町 はま路

『南総里見八大伝』に登場する美女浜路は、恋人のために非業の死を遂げます。

19 斎宮女御 みな鶴姫

牛若丸を恋い慕う役どころ、皆鶴姫を描いています。

20 大中臣頼基 鬼一法げん

21 藤原仲文 遠藤武者

満月の夜、恋こがれた人妻の首を誤って獲ってしまう遠藤武者。こののち出家して修行し、文覚上人となります。

22・23 『大日本六十余州』

大判錦絵 嘉永5年 (1852)

風景を描いた円形のコマ絵と、各地にちなんだ役柄の役者絵を取り合わせる連作です。

22 ^{いずみくず は} 和泉葛の葉

美女に化けた妖狐「葛の葉」は和泉 国 和泉郡（大阪府和泉市）に現れます。

23 ^{するが} 駿河富士の白酒売

名物の白酒にかけ、歌舞伎に登場する白酒売を描きます。

24 雪見の宴 大判錦絵三枚続 嘉永6年（1853）

25 夕立雨やどりの囃 大判錦絵三枚続 安政元年（1854）

右の一枚で相合傘をしているのは『与話情 浮名横櫛』（通称「切られ与三」）に登場するお富と与三のカップルです。

26 ^{みたてろっか せん} 見立六歌仙 大判錦絵二枚続 安政元年（1854）

六歌仙に見立てた役者たちを描いていますが、実は彼らの死後に刊行された作品です。

27~30 ^{きよがきなついろ は} 『清書七伊路波』 大判錦絵 安政3年（1856）

左上の黒い屏風に記された文字の音ではじまる歌舞伎の場面を描く連作。例えば No.27 は「御・身・美・彌・箕・見・味」→「み」の音で始まる「水売り」を描いています。

27 ^{せきしょう} みづうりの夕照 八景のうち

水売りとは、涼しげに飾った屋台を背負って、砂糖や団子の入った冷水を売り歩く夏の行商です。

28 たから子の児雷也

盗賊の児雷也が二千両の大金を奪い去る場面です。

29 ^{りぎょ} 鯉魚の一軸 ^{きづかわよえもん} 木津川与右衛門

実はこの鯉、川に落ちた掛け軸から逃げ出したもの。最後には戦いに負け、掛け軸に戻ります。

30 ^{はじべえ} ^{すくねたろう} とう天こう 土師兵衛 宿祢太郎

31~33 ^{ななついろ はしゅうい} 『七伊呂波拾遺』 大判錦絵 安政3年（1856）

『清書七伊路波』同様の趣向で、数にちなんだ歌舞伎の場面を描きます。

31 ^{いつくあたいせんきん} 一刻 価千金 ^{いしかわごえもん} 石川五右衛門

「絶景かな絶景かな、春の眺めは 値千金とは 小せえ 小せえ…」の名台詞で有名な大泥棒、石川五右衛門の姿。

32 ^{にじゅうしこう} 二十四孝 竹の子

^{よこぞう} ^{じひぞう} 横蔵・慈悲蔵の兄弟が秘伝の巻物をめぐり争う場面です。

33 ^{ももよぐるま} ^{ふかくさ} ^{しょうしょう} 百夜車 深草の少将

^{おののこまち} 絶世の美女小野小町に思いを寄せ通い続けますが、思いかわず命を落としたという伝説の人物です。

34~36 ^{みたてさんこう} 『見立三光』 大判錦絵 安政5年（1858）

日・月・星（=三光）にちなむ歌舞伎の役どころを描きます。

34 ^{みたてさんこうのうちのひ} ^{たいらのきよもり} 見立三光之内日 平清盛

清盛には、^{おんど} 菅戸の瀬戸（広島県呉市）を突貫工事する際、夕日に向かって金の扇を仰ぎ、沈まないよう招き返して工事を早く進めたという伝説があります。



35 ^{みたてさんこうのうちのつき} ^{みかづきおせん} 見立三光之内月 朧於仙

月夜、浮かび上がるように描かれるのは悪女の三日月お仙です。

36 ^{みたてさんこうのうちのほし} ^{おおとものくるぬし} 見立三光之内星 大伴黒主

No.12 と同じ関兵衛が、星占いをする場面。

37・38 ^{ここんやくしやにがおたいぜん} 『古今俳優似顔大全』

大判錦絵二枚続 文久3年（1863）

最晩年に手がけた101枚揃のシリーズ。300人超の似顔を描いた、役者絵の集大成です。

37 松本家系譜

38 ^{やまとやばんどう} 大和家坂東系譜

^{ばんどうみつごろう} 初代~六代の坂東三津五郎。左中の坂東しうかは女役を得意とし、死後に五代目の名を贈られました。

39 ^{いまようみたてしこうしょう} 今様見立土農工商 職人

大判錦絵三枚続 安政4年（1857）

下絵を版木に貼って彫る彫師、にじみ止めを塗る摺師など、浮世絵工房の様子です。当時は男性の仕事でしたが、美人の姿で描かれています。

40～43 三代歌川豊国・二代歌川国久

『江戸名所百人美女』

大判錦絵 安政4～5年(1857～58)

晩年に描いた100枚揃の大作。上部のコマ絵は、娘婿の二代国久(1832～91)が担当しています。

40 永代橋 安政4年(1857)

隅田川沿いの渡し場で、提灯を持つ女性。提灯には豊国の名にちなんだ「豊」「歌」の字がみえます。

41 豎川 安政5年(1858)

42 よし原 安政5年(1858)

禿に髪を梳かせ、客の手紙を読む吉原の遊女の姿です。

43 柳島 安政5年(1858)

44～47 三代歌川豊国『古今名婦伝』

大判錦絵 文久2～3年(1862～63)

『修紫田舎源氏』で豊国とタッグを組んだ人気作家、柳亭種彦の文が添えられる美人画のシリーズです。

44 清少納言 文久3年(1863)

ある雪の日、清少納言が白居易の詩の一節「香炉峰の雪は簾を上げて見る」になぞらえて、中宮定子に雪を見せる場面。『枕草子』中のエピソードです。

45 文展千代 文久3年(1863)

京都の東山や五条橋で、夜な夜な文を広げて読む狂女の姿。

46 遊女地獄 文久3年(1863)

才智にだけ、名僧一休と歌の問答をしたことで知られる伝説の遊女、地獄太夫を描いています。

47 乳母浅岡 文久2年(1862)

若君を守る忠実な乳母、浅岡の姿です。

48～50 三代歌川豊国・歌川広重

『東都高名会席尽』 大判錦絵 嘉永5～6年(1852～53)

背景の有名な料亭や風景を広重(1797～1858)、前面の歌舞伎役者を豊国が描く連作。役者絵は、各料亭の名にちなんでいます。

48 橋もと 牛若丸 嘉永5年(1852)

弁慶と牛若丸が最初に出会う五条橋のもとと、料亭の名前「橋もと」をかけています。

49 草加楼 おり糸 嘉永5年(1852)

両国の旅亭、草加楼にちなみ、惣嫁(娼婦)を描いています。

50 浅草蔵前 八百やお七 嘉永6年(1853)

恋人に会うために放火をし、火あぶりになったお七は浄瑠璃や歌舞伎のモデルとして好まれました。

51～60 三代歌川豊国・歌川広重

『双筆五十三次』 大判錦絵 安政元～2年(1854～55)頃

それぞれ人物画・風景画の第一人者であった豊国と広重の合作による55枚組連作。風景を広重、人物を豊国が手がけています。

51 川崎 安政元年(1854)

大森の名産品、麦わら細工の箱を作っています。

52 加奈川 安政元年(1854)

女装の人物が団子をほおぼるユニークな図様は、戸塚のお祭りにちなんだものとみられます。



53 藤枝 安政元年(1854)

コマ絵に描かれた瀬戸川を、川越人足のかつぐ駕籠ののって渡る様子です。

54 日坂 安政元年(1854)

歌舞伎『ひらがな盛衰記』で、遊女梅ヶ枝が恋人のために奇跡を祈って手水鉢を叩くシーンです。物語ではこの後、願いが通じて小判が天から降ってきます。

55 白須賀 安政2年(1855)

義賊、児雷也が母を殺された赤ん坊を引き取る場面です。

56 吉田 安政2年(1855)

コマ絵の吉田橋は東海道中でも長い橋として有名でした。

57 御油 安政2年(1855)

二人の人物は『本朝廿四孝』の横蔵・慈悲蔵兄弟。当時の人気役者の風貌が重ねられています。

58 岡崎 安政2年(1855)

岡崎の長者の娘、浄瑠璃姫と、恋仲の牛若丸を描きます。

59 草津 安政2年(1855)

背景の湖は琵琶湖。近江八景で知られる瀬田の橋を、雨具を身につけた人々が行き交っています。

60 京 安政2年(1855)

華やかな衣装の人物は、豊国が挿絵を手がけた『**修紫田舎源氏**』の主人公、足利光氏です。

61~62 三代歌川豊国・二代歌川広重

『**東都四季名所尽**』 大判錦絵 文久2年(1862)

背景の扇形のコマ絵を二代広重(1825~69)、手前の役者を豊国が描いています。

61 今戸はし真乳山

待乳山 聖天(台東区浅草)は庶民の信仰を集め、雪見の名所として知られていました。

62 元柳はし

66 十六

逢坂山で偶然出会った空衣と光氏でしたが、空衣は駕籠の中に紅葉に結んだ書付を残し、去ってしまいます。

67 廿三

新春、紫(=紫の上、左)が育てている明石姫のもとに実の母朝霧からの贈り物が届きます。

68 三代歌川豊国・歌川貞景

江戸紫五十四帖 第三 うつせみ

大判錦絵 嘉永5年(1852)

光氏が娘と勘違いして寝所へしのでしまう人妻、空衣。人気役者の面影が重ねられています。貞景(生没年未詳)は三代豊国の弟子で、師の画風をよく踏襲しました。

69 三代歌川豊国・歌川貞秀

江戸紫五十四帖 第八 花乃宴

大判錦絵 嘉永5年(1852)

背景を描く貞秀(1807~78/79)は、豊国の弟子の一人で、空から見たような構図の風景画「通覧」でその名を馳せました。

70 三代歌川豊国・歌川広重

東源氏 雪乃庭 大判錦絵三枚続 安政元年(1854)

光氏が雪見を楽しむ庭に巨大な雪兔の姿がみえます。寅年の十二月の出版なので、翌年の干支、兔にちなむものと考えられます。

71 三代歌川豊国・歌川広重

田子のうら風景 大判錦絵三枚続 安政4年(1857)

富士山をのぞむ、田子の浦(静岡県富士市)の浜の穏やかな風景。

72 三代歌川豊国・二代歌川広重

合筆源氏 庭中之雪 大判錦絵三枚続 安政6年(1859)

愛妻の紫を元気付けるため、光氏が雪遊びを催す場面にもとくく図様です。

73 三代歌川豊国

源氏御祝言図 大判錦絵三枚続 文久元年(1861)

光氏が迎える花嫁は二葉の君(=葵上)と思われま。

74 三代歌川豊国・二代歌川広重

相州江之嶋 大判錦絵三枚続 文久元年(1861)

江戸時代の江ノ島も、レジャーをかねて弁才天へ参詣する人々で賑わっていました。

II 江戸が愛した源氏物語

— 『**修紫田舎源氏**』の世界

柳亭種彦作・歌川国貞(=三代豊国)画の合巻『**修紫田舎源氏**』は、紫式部の『源氏物語』をアレンジした物語で、発行部数1万部を超すといわれるベストセラーです。このブームを背景に『**修紫田舎源氏**』を題材にした浮世絵、「源氏絵」が刊行されるようになり、豊国を始めとする様々な絵師が筆をとっています。

63~67 三代歌川豊国 『**其姿紫の写絵**』

大判錦絵 弘化4~嘉永5年(1847~52)

『**修紫田舎源氏**』の名場面を浮世絵として刊行した連作。

63 三

暮をうつ空衣(=空蝉、中央)と村萩(=軒端の萩、左)母娘を、衝立の陰からのぞく主人公の足利光氏です。

64 九

二葉の君(=葵上)の弔いを終え、光氏が嵯峨の屋敷に久しぶりに帰ってきた場面。

65 十三

須磨の海女たちが、桶や籠に入った海の幸を献上しています。

75 三代歌川豊国・二代歌川広重

いまようげん じろうにやくあわせ やまと
今様源氏者若合 大和よしの山

大判錦絵三枚続 文久2年(1862)

光氏と遊女阿古木(=六条御息所)が花見をする場面にもとづくと思われま

76 三代歌川豊国・二代歌川広重

東海道薩多峠 大判錦絵三枚続 文久3年(1863)

険しい峠と富士の絶景で知られた薩多山(静岡県)の風景。

77 三代歌川豊国

みただげん じきんごしよがの うち さいしき
見立源氏琴碁書画之内 彩色のいろいろ

大判錦絵三枚続 慶応元年(1865)



黒い着物の絵師は、袖の丸いマーク「年玉印」から、三代豊国自身の姿と考えられます。

78~83 二代歌川国貞 『紫式部源氏かるた』

大判錦絵 安政4年(1857)

No.63~67と同じく、『修紫田舎源氏』をもとにした54枚揃。二代国貞(1823~80)は、お家芸の源氏絵を師匠から見事に受け継いでいます。

78 二 ははき木

わかしゅうまげ
若衆鬻の光氏と藤の方(=藤壺)。室内に差し込む月の光が見事に表現されています。

79 四 タがほ

しつと いきりよう あこぎ
嫉妬に狂い、生霊となった阿古木(=六条御息所)が、光氏と黄昏(=夕顔)のもとに現れます。

80 七 紅葉の賀

紅葉の宴で能を舞っている最中、鬼面をつけた曲者に襲われた光氏。見事な立ち回りで取り押さえます。

81 十二 須磨

No.65 とほぼ同じ図様ですが、千鳥が描き加えられています。

82 三十三 藤のうら葉

背景にうっすらと見える木目は、版木の状態が良い、早い段階に摺られたことを示します。

83 三十七 かしわ木

けまり かしわのすけ みそ
蹴鞠をする 柏之助(=柏木)が姫君を見初める場面。

84 豊原国周

いまようげん じ
今様源氏せきひつ 大判錦絵三枚続 明治2年(1869)

豊国の得意とした源氏絵を、弟子の国周も描いています。テーブルや銀食器など、西洋風の室内でくつろぐ光氏の姿です。

85 豊原国周

きんきしよが
琴碁書画之内 画 大判錦絵三枚続 明治2年(1869)



III 三代豊国の系譜

—国周から周延へ—



三代豊国の門下からは、優れた弟子たちが輩出しました。その代表格が、明治期に活躍した豊原国周(1835~1900)と楊洲周延(1838~1912)です。国周は14歳のときに入門。周延は最晩年の豊国に師事しており、没後は国周の弟子となっています。

二人は師匠の得意ジャンルを継承しつつ、個性的な画風を確立し国周は役者絵、周延は美人画で一世を風靡しました。

86~106 豊原国周

86~88 『開花人情鏡』 大判錦絵 明治11年(1878)

文明開化の新しい風俗を取り入れて描いた美人画のシリーズ。

86 勉強

せきばん かたわ
石板を傍らに置き洋書を読む女性の姿。明治維新後、女性の高等教育も徐々に整備されていきました。

87 写真

高度な技術が必要だった写真の撮影風景。幕末には、日本初の女性写真師も登場しました。

88 権妻

ようがき
高価な洋傘をさし、明治2年(1869)に発明された人力車に乗る美人。権妻とは妾のことです。

89 米国グラント氏御通行之繁栄

大判錦絵三枚続 明治12年(1879)

明治12年に来日したアメリカ大統領グラントのパレードを背景に、役者たちの姿をシルエットで描いています。

90 皇国自漫 初陽 因雲閣

大判錦絵三枚続 明治17年(1884)

「^{だんきくさ}団菊左」と呼ばれた、九代目市川團十郎、五代目尾上菊五郎、初代市川左団次がそぞい踏みです。

91~95 『見立屋夜廿四時』 大判錦絵 明治23年(1890)

1日、24時間を美人になぞらえた連作。様々な階層の女性の、^{つや}艶やかな姿をとらえています。

91 午前一時

宮中など高貴な身分の人々に仕える官女が明かりを手にしています。大きな振り子時計は高価な輸入の品でしょう。

92 午前三時

93 午後一時

「^{そくはつ}束髪」と呼ばれる西洋風の髪型で、英語を勉強する美人の姿。両手に指輪をはめています。

94 午後四時

95 午後七時

かがり火をバックに、美人が植木を手にとり眺めています。縁日の植木市で的一幕でしょう。

96~100 『梅幸百種』

大判錦絵 明治26~27年(1893~94)

五代目尾上菊五郎が演じる役どころを100図描いた連作。国周お気に入りの歌舞伎役者でした。「梅幸」は菊五郎の^{はいみょう}俳名です。

96 奴 明治26年(1893)

顔を赤く塗った「^{あか づら}赤っ面」の奴(家来役)を演じる姿。

97 篠原国幹

西南戦争で活躍した鹿児島藩士、篠原国幹の活躍は『^{さつきばれ}皇月晴上野朝風』などの歌舞伎の題材になりました。

98 福岡貢 明治26年(1893)

馴染みの遊女お紺に冷たくされ、^{ぎやくじょう}逆上して遊女10人を手にかけてしまう場面です。

99 扇屋夕霧 明治26年(1893)

100 土蜘蛛 明治27年(1894)

土蜘蛛の精が撒き散らす糸は、通称「^{ちすじ}千筋の糸」。糸を鮮やかに^く繰り出す舞台演出が人気を集めました。

101~106 『市川團十郎 演芸百番』

大判錦絵 明治27~36年(1894~1903)

「梅幸百種」の五代目尾上菊五郎と同時期の人気歌舞伎役者で、「劇聖」と呼ばれた名優、九代目團十郎を描く100枚揃です。

101 暫 明治27年(1894)

扇のように大きな袖の衣装が特徴的な演目「暫」を描きます。

102 花川戸助六 明治30年(1897)

『^{すけろくゆかりのえ どりざくら}助六 縁 江戸桜』に登場する色男、助六。彼を慕う花魁^{した おいらん}たちに煙管を差し出され、両手で受け取る場面。

103 平知盛 明治31年(1898)

104 鷺娘 明治31年(1898)

白無垢姿の美しい娘は、実は白鷺の化身です。

105 曾我五郎

106 十八番之内 象引 明治31年(1898)

武者たちが荒々しく象を引き合う「象引」は、市川家代々のヒット作「^{かぶ きじゅうはちばん}歌舞伎 十八番」の一つです。

107~121 楊洲周延

107~109 『戦地八景』 大判錦絵 明治10年(1877)

同年の西南戦争にまつわるエピソードを、8つ集めた連作です。

107 木留之夕照 篠原国幹

108 凱歌之帰帆 西郷隆盛

西南戦争を平定して舟で帰る政府軍をバックに、戦いに敗れた西郷隆盛を描きます。

109 離別之晩鐘 西郷妾花

戦地へ向かう西郷を見送る女性の姿を描いています。

110 江戸砂子年中行事 重陽之菊

大判錦絵三枚続 明治18年(1885)

重陽は陰暦の九月九日で五節句の一つ。菊を愛で、長寿を祈る菊酒を飲みました。

111 江戸風俗 朧春花之夜桜

大判錦絵三枚続 明治22年(1889)

112 ^{さらしな たご}更科田毎の月 大判錦絵三枚続 明治24年(1891)
^{しなのくにさらしな}信濃国更科(長野県千曲市) ^{ちくま}姨捨にある ^{たなだ}棚田は、鏡台山から上る月が映りこむ美しい風景で知られました。

113~115 『時代かがみ』 大判錦絵

明治30~31年(1897~98) ※出品作は全て明治30年の制作
南北朝時代から明治まで、各時代の女性50人を描いた美人画の連作。古い年代のコマ絵の粋が虫食い風になっています。

113 ^{けんむのころ}建武之頃
^{いちめがさ}市女笠をかぶった南北朝時代の女性。笠から垂らした布には、^{ぬのめず}布目摺り(湿らせた紙に布を押し付けて布目を摺りとる技法)
^{ほどこ}が施されています。

114 ^{めいおのころ}明和之頃
身分の高い女性は、ある程度の年になると眉をそり、額の上部に別の眉を描いていました。

115 明治
男装した美人は、祭の際の^{てごまい}「手古舞」と呼ばれる^{よそお}装いです。

116~121 ^{しんびじん}『真美人』 明治30~31年(1897~98)
様々な姿の女性を描く36枚組の連作。女学生や子供など、それまで描かれてこなかった新しい時代の美人像を表現しています。

116 五 明治30年(1897)

117 九 明治30年(1897)

^{きんぎよだま}金魚玉(金魚を入れて軒先に吊るすガラス器)を手にする
あどけない少女の姿です。

118 十 明治30年(1897)

西洋式の鏡台にむかい、タオルで顔をぬぐう美人の姿。
タオルには^{ぬのめず}布目摺りがみられます。



119 十四 明治30年(1897)
洋傘やシャツ、リボンで華やかに装った女学生の姿です。

120 廿九 明治31年(1898)

121 三十一 明治31年(1898)

絵の具の光沢を出して模様を摺りだす技法、「正面摺」で柄がつけられた椅子にかけられる女性は、教師とみられます。

【参考出品】 版本挿絵の世界

三代豊国が国貞時代~晩年まで、20年あまりにわたって手がけた版本をご紹介します。なおこれらの版本は版画家、小野忠重氏(1909~90)が収集したものです。

【1】 柳亭種彦(著) 歌川国貞(画)

『^{にせむらさきいなかげんじ}修紫田舎源氏』 初編上 文政13年(1830)

『源氏物語』をアレンジした物語と国貞の挿絵が人気を呼んだ大ヒット作。三十八編まで発行されましたが、天保の改革により未完のまま発売禁止となりました。出品作は再版本です。

【2】 ^{はながさぶんきょう}花笠文京(序) 歌川国貞(画)

『^{そめひさまつうきなのよみうり}お染久松色読販』 天保2年(1831)

【3】 ^{えんぼ}立川焉馬(撰) 歌川国貞(画)

『^{しばいさいけんさんぼそう}芝居細見三葉草』 天保3年(1832)

【4】 ^{えんぼ}立川焉馬(撰) 歌川国貞(画)

『^{やくしやきじんてん}俳優時人伝』 二編下 天保4年(1833)

【5】 ^{まんていおうが}万亭應賀(著) 三代歌川豊国(画)

『^{しやかはっそうやまとぶんこ}釈迦八相倭文庫』 初編上・下/三編上・下
弘化2年/3年(1845/1846)

【6】 ^{けいさいえいせん}溪斎英泉ほか(著) 三代歌川豊国(画)

『^{そのゆかりひなのおもかげ}其由縁鄙俤』 三編上・下/四編上・下
弘化5年/嘉永2年(1848/1849)

【7】 ^{しきていこさんば}式亭小三馬(著) 三代歌川豊国(画)

『^{りゅうおうたろうえいゆうものがたり}龍王太郎英雄譚』 六編上・下 嘉永2年(1849)

【8】 ^{りゅうていせんか}笠亭仙果(抄) 三代歌川豊国(画)

『^{そうし}犬の草紙』 十編上・下 嘉永3年(1850)

【9】 歌川国芳・三代歌川豊国(画)

『あふむせき』 嘉永4~5年(1851-52)

【10】 ^{りゅうていせんか}笠亭仙果(著) 三代歌川豊国(画)

『^{ようふ}三都妖婦伝』 安政3年(1856)

※全て小野忠重版画館蔵



町田市立国際版画美術館 2014年3月8日発行

〒194-0013 東京都町田市原町田4-28-1

<http://hanga-museum.jp/>

